平成２０ 年（２００８年）１０月２５日（土）　（第４３号）

東九州支部報

第７回青少年体験登山大会（7月２０日久住山頂にて）

今年も久住山で

第七回青少年体験登山大会

第七回を迎える青少年体験登山大会が、今年も子供たちの夏休みの始まったばかりの、去る七月二十日（日）に、九重山系の久住山で実施された。次代を担う子供や若者たちに、山に慣れ親しむ機会を提供し、その中で山のすばらしさや楽しさを体験してもらうことを目的に、二〇〇二年の国際山岳年の記念行事の一環として実施していらい、東九州支部が毎年続けている行事である。

公益社団法人を目指そうとする日本山岳会では、今後は公益目的事業の積極的な展開が大きな課題である。このため、当支部ではこの青少年体験登山大会などが公益目的事業として本部に登録されている。

参加者は全部で三二名で、今年も青少年に限らず、大人の初心の参加も募り、小中学生から高年齢者まで幅広い参加が見られ、好天にも恵まれて盛大に、楽しく実施された。そのもようを久保会員に報告をお願いした。

山頂は元気な笑顔がいっぱい

報告者　久保洋一

ご存知の通り今回の体験登山は社団法人としての日本山学会の公益事業の一環として行われました。それにしては会員、会友の参加が直前まで少なく、事務局をやきもきさせてしまったのはどうしてだろう。もう少し、年間の行事にあげてあるからというだけでなく、行事が近くなったときはその都度あらためてそ

《　も　く　じ　》

第７回青少年体験登山大会	1
熊群山・白石台	3
前門岳・石割山・出雲岳	3
マッキンレー④	5
誕生日登山	5
嗚呼七年山③	6
先達を語る⑦「木本善重氏」	7
豊後今市の三角点	8
私の無名山ガイドブック 35	9
クラブ紹介⑨「日田山岳会」	10
お知らせ	11
後記	12

の行事に特化した告知が必要ということでしょうか。そういう私自身、直前まで他の山行を予定していて西さんに叱られてしまいました。

七月二〇日（日）午前七時、大分駅前には二五名が集合。大型貸切バス一台に乗って牧の戸へ向かいます。下界の天気は快晴、絶好の登山日和に思えます。

牧ノ戸峠登山口にて

バスで移動中、各自、自己紹介をしました。八歳から九三歳までの幅広い年齢層の参加です。子供たちみな、おじいちゃんやおとうさんおかあさんと一緒に参加しています。自己紹介を聞いていて分かったのですが、おじいちゃん世代は日本アルプス等、遠方の山までよく登られています。やっぱり、山好きな人たちが集まったんだなーとしみじみ思いました。そのおじいちゃんの中の一人の方が「山に入るときは山に向かって最敬礼、山から下りると再び山に向かって最敬礼をいつも孫にさせております。」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。

それから西さんの指名で加藤さんが久住山の説明、国立公園名のいきさつ、入山心得などをわかりやすく話してくれました。また、飯田さんは『阿蘇くじゅう国立公園』という名前が決まった経緯をさらに詳しく補足説明してくれました。途中、湯布院の道の駅でトイレ休憩をし、牧の戸へは八時四五分に到着。

下界では快晴だった天気も、このあたりで少し雲行きが悪くなってきました。山はガスがかかっていて見えません。でも雨が降りそうな天気ではありません。

売店の横の広場に牧の戸から合流の七名の方を含めて三二名全員集合し加藤さんの指揮の下、登山前の準備体操をしました。

それからA版（健脚組）、B班（元気組）、C班（ゆっくり組）の三つのグループに分かれ、リーダーはそれぞれ飯田さん、加藤さん、阿南さんが務めて班編成。九時一五分過ぎにA班から順に出発しました。

私はゆっくりの最後のグループで登山開始。熊本から二名参加している私の知人に、コンパスと地図の見方を説明しながらの登山となりました。ゆっくり登っていくと参加者の一人で、最初の展望台のところでもうバテてしまっている人を発見しました。西さんが少し活を入れ、どうにか登山を続行してもらいます。雲があるせいで陽射しは気にせずに登れます。途中、扇ヶ鼻分かれ手前の一五一二mの小ピーク、そして久住分かれで休憩し、久住山頂に一二時前に到着です。

元気組は先に着いていて、中には早々食事をとり始めている人もいます。最初に出た健脚組が中岳に登ってきて、一〇分遅れで到着しました。

全員揃ったところで昼食をとりました。皆さん話がはずみ笑顔がこぼれます。加藤さんのハーモニカも心地よく響きます。ガスっていた景色の方もほとんど晴れて、まわりの山々が見えています。遠く由布岳の確認もできました。

私は熊本の二人にコンパスと地図を使った山座同定の方法を教えてあげましたが、あまりにぴったりあったので操作した本人もびっくりしています。

食事の後は全員そろって記念撮影をしました。そして下山開始。私たちは最後尾について下りていきました。久住分かれまで下りてきて、地図上の進行したい方向を現地で特定する方法を教えてあげましたが、なかなか一度じゃ呑み込めないみたいでなんども繰り返し練習していました。

標高一五〇三m～一五一二mにいたる間だったと思います、登りのときは気付かなかったのですが、あやめの花が群生して咲いています。立ち止まってしばらく眺めました。このあたりは谷筋が林になっているので小鳥のさえずりも聞こえとても心地よいひと時です。

さらに下りていくと体験登山に参加した子供でしょう。靴を脱いでおとうさんの横に立っています。「足に豆でもできたのかな？大丈夫？」と声を掛けましたが本人は平気そうな顔をしています。これなら大丈夫だなと思い先に進みます。

今日は終始とてもゆっくりと歩いたので汗もあまりかかず息も切れません。これから足腰が弱くなっていくとこんな登山がいいなと思います。

一五時二〇分、牧の戸着。私たちが最後尾だと思っていましたが、また遅れている人がいたみたいでしばらく待ちました。そのとき熊本の二人は二、三人の年配の方に手土産を買ってもらっていました。お心遣いをありがたく思いました。

最後まで頑張った高齢の方も、無事に下山し、全員そろったので、ここで解散式。牧ノ戸集合組はここでお別れで、貸し切りバスの組は一路大分へ。熊本の二人が手を振って見送ってくれました。

（健脚組は中岳へ）

月例山行報告

熊群山(804.9m)・白石台(809.6m)

（八月月例山行）

牧野信江

八月は八〇〇ｍの山で、目的の山は熊群山と、白石台。

八月二十四日（日）午前五時にサニーを出発。庄内の由布市役所前で飯田さんと合流。ここからは中野さんの車一台で行くことになった。

熊群山へは、神社からのコースではなく、西側の林道を車で上って行くことになった。直野から上る林道はあまり使われていないのか、舗装はされているが両側の竹が道路を覆っていて、車はそれを押し分けながら行くところが多い。車道に柵があったのは猪よけのためか。

突然車の前方に猪の子、それも四匹も・・・。うり坊たちが道をちょろちょろ逃げていく。初めて見た。かわいかった。

牧舎のある先の林道三叉路に車を駐車する。ここから東に見える山頂に向かって登り始める。時刻は六時二十五分だ。草がおい茂った林道はわりと平坦で、二十分ほどで峠に着いた。ここから左後方に行けば時山だが、稜線沿いにあった道は草藪に覆われていて、とうてい歩けるような状況ではない。

前方に鉄条網の柵とゲートがあり、これを開けて進む。牛の放牧のための柵だが、今は使われてはいないようだ。林に入ると小鳥の声が聞えてきた。飯田さんに教えてもらったのだが、オオルリとサンコウチョウだという。きれいな鳴き声だった。

山頂に向かう稜線の登り口にさしかかると、大平はつらつ登山会のオレンジ色のプレートが下がっていた。最後の登り一〇分ほどで熊群山（八〇四，九ｍ）頂到着。七時ちょうどだ。四等三角点があった。木々が茂っていて展望はない。恒例のバンザイとヤッホーをして下山する。七時四五分に車に着いた。

（熊群山頂にて）

時刻もまだ早いので、時山(958.3m)に行ってみようということになり。直野内山から林道を入って、稜線沿いの林道に入ったところで車を止めて歩き始める。しかし、途中から林道が完全にヤブに塞がれて、とても行けそうにないのであきらめて引き返した。八時四〇分車に戻った。ここはアブみたいな虫が多くて、車の中まで何匹も入ってきた。

次の目的地は白石台。二万五千分の一の地図では「湯平」で、山下池、小田の池の東にある三角点がそれである。

阿蘇野からトンネルを抜けて湯平温泉を下っていくと、前方にその台形の山が見えた。飯田さんが以前登った倉本からのコースと、中野さんが登った下津々良からのコースのどちらにするかということになったが、林道のある（楽なコース）中野コースとなった。

下津々良から林道を入っていく。路面が荒れて、でこぼこで車体がこすれる。途中の谷間にちょっと広い広場があったので、ここに車を駐めた。九時一五分だ。

荒れた急な林道はまだ上へ続いている。この林道を登り、九時四十五分に峠についた。右に少しはいると湯平テレビ放送の電波塔がある。その横を通り、ヒノキの植林地の中をいったん鞍部に下り、再び急な登り返しである。雨上がりの急斜面はすべりやすい。一〇時一七分に白石台（八〇九．六ｍ）に着いた。

三等三角点があり、ヒノキの植林地の中でここも展望はない。中野さんが以前来て、三角点の周りの木を切っておいたという。そこらにある木をベンチにして腰を下ろし、食事をした。

（白石台にて）

一〇時四〇分に下山開始。帰りは近道して帰ることになった。鞍部から車を置いてある谷に向かって直降下のヤブこぎとなる。夏草の生い茂るスギ林の中、飯田さん、中野さんのＧＰＳの助けで難なく一一時二〇分には車に着いた。

その到着寸前、先頭を行く中野さんがアシナガバチの巣のそばを知らずに通ってしまい、すぐあとを行く飯田さんが腕を刺されてしまった。西さんが軟膏を持っていたので助かった。

午前中に山行が終わった。天気も良く、挟間の「いやしの湯」に入って帰った。

参加者…西、飯田、中野、牧野

門前岳(921.7m)石割岳(941.5m)角取山(717.8m)出雲岳(847.7m)

（九月月例山行）

中野　稔

今月の月例山行は九月で、九〇〇ｍの山に登るのだ。山に登れるという事の素晴らしさは、無数にある趣味の一つと同じように、興味無い人にとっては理解しがたいものだ。だが、何かに打ち込めるという事の素晴らしさは、時代を超え、国境を越えて永遠の感動を人々に与えてくれるものと信じる。オリンピックや、パラリンピック、ネンリンピックに公認されている競技だけでなく、未公認や、ギネスブックの様なスポーツと言えるかどうか疑問符を打ちたい競技もあるが、人の数だけ趣味やスポーツがあっていいと思う。

大分を定刻に別府のラクテン地を目指す。別府インターから日田インターにワープ。

思い出の中ではすべてはバラ色になるのだ、もんくある？狭い林道も市街地も高速も走る時は其れなりに神経を使う。七時十分過ぎ日田のインター脇のローソンにて安部車と合流。

二台のサーフは国道二一二号にて松原ダム、下筌ダムと南下し国道四四二号線にて鯛生金山を目指す。竹原峠には立派なトンネルが開通しており、大分県側は雨空を思わせる霧と暗雲が漂っていたのに、トンネルを出て福岡県側に入ると一転晴れて快晴である。出口から数分のところに今宵の宿泊所となった展望広場があり、素晴らしい三六〇度の展望が得られた。

前門岳周辺は、九百メートル級の山の宝庫であり殆どが登山可能である。国見山、三国山の北に位置し、東に酒呑天童子、猿駈山、渡神岳、釈迦岳、午後に登る石割岳が北に見えている。登山口は八女郡の黒木町東部の矢部村にある。日向神ダム上流のニタ板を南下し、今屋敷集落を過ぎてから三差路を左に巻く。

前門岳の西の沢が登山コースで標識が整備されている。登山口付近は雑草が煩かったが、沢に近づくと古い丸太の橋が三か所ほど架けられている。迂回路は無いので要注意だね。一時間ほどで立派な林道に出るが横切るだけ。山頂の南の尾根を目指すが、地元の人が整備したらしく迷わずに行ける。南尾根の鞍部からは五分ぐらいで素晴らしい展望がある頂だ。途中で休憩した国道沿いの標高六百メートルの展望所とは一味違う眺望である。

（前門岳山頂にて）

お昼は、日向神ダムの堤防の上だ。人工の絶壁であり、方や湖だ。両岸は立派な岩壁である。ダム造りの典型と言うべきか、見本である。これから登る平野岳、石割岳は日向神ダムの北に位置し、南西方向にある平野小学校から登ることになる。この辺りの棚田には彼岸花が今を盛りと咲き誇り、一行を迎えてくれた。

小学校のグランドに駐車させてもらい、案内板と赤いテープを頼りに登る。棚田の脇道を行くと猪ゲートが二か所、谷あいの登山道を行くと林道に出会う。この林道終点から、東の尾根道を行くと別の林道に出る。この林道は横切るがこれからが急な登りとなり、木の階段に出会う。平野岳山頂付近は茅などに覆われ山頂まで難儀した。あんじょう、安部先生は遅れて来たせいもあって半時ほど右往左往したらしい。

展望は無いが、此処から北にある石割岳には立派な踏み分けと鞍部からはロープが手招いていた。

（石割岳山頂にて）

超急登である。若い人にとっては、なんでもない山だが、石割岳の北にある登山道はこっちより楽だ。山頂からの展望は素晴らしい。

下りは鞍部から林道に降りたが所要時間は十分ぐらい。南に三分位で、取り付き口に着くが此処で後続の安部先生を探しながら待つことになる。四時十分に小学校の校庭に立つ。

今宵の宿は朝の展望台にすることとなった。トイレもあり、宴会にうってつけのあずま家もある。夕暮れ迫る展望台はしばし賑やかな空間。世俗から離れた時間は貴重なものだ。テントの中では夜、寝汗をかき熟睡は出来なかったが疲れは取れた。四時には起こされ、食事となり五時過ぎにはキャンプを後にした。

十五分位で鯛生金山に到着。ここで六時に佐藤（秀）君と落ち合う約束だ。待っている間に、カメルーンキャンプ騒動で有名な坂本休元村長さんに出会うことになる。最初は誰かがトイレ掃除をしているとぐらいしか思わなかったが、よくよく見れば有名な村長さんだ。しばし歓談をして秀君を待つ。まだ暗いうちから、独りでトイレの掃除をしている元村長さんの姿に、館長としての情熱を感じた。

国道四四二号線を東に向かい間地を北東に入り、角取山と出雲岳の中間の谷の分岐路につく。ここを左に行き、角取山の西北の尾根まで林道を行く。多少藪があるが最近人が登った形跡がある。山頂まで三〇分足らずの軽いヤブこぎだ。角取山の北二キロ辺りに渡神岳があるが勿論見えない。

（角取山頂にて）

出雲岳には先ほどの谷の分岐路に戻り、最近開通した林道を東方向に走り、北北東の尾根と尾根の谷間辺りに駐車。角取山を終えたころから降り始めた雨は本降りになった。雨具をつけて出発。作業道を詰めて北尾根に取り付く。この尾根は超急登であり雨のお陰で滑りやすいとくる。小さなピークを越えて再び急な登り。それを登りついてさらにその奥が頂上で三等三角点がある。思った以上に時間がかかった。雨の中、早々の下山となる。名前の割には今後も人気の出る山ではないと確信する。

（出雲岳山頂にて）

下山したら流れ解散と相成り、三方向へ向かった。国道三八七号から四四二号にて黒川温泉へ。国道沿いの温泉につかり一路大分を目指す。

コースタイム

前門岳登山口8：17　林道9：19
前門岳山頂9：55　林道10：33
平野小学校11：34
石割岳登山口（平野小学校）12：45　林道終点13：22　平野岳(895m)13：57　石割岳14：39
取り付き口15：00　登山口16：

10
角取山取り付き口6：37　山頂7：09～22　取り付き口7：46
出雲岳取り付き口8：14　山頂9：22～45　取り付き口　10：49
参加者…西、飯田、安部、中野、佐藤（秀）

マッキンレイ（6194m）山行報告④

星子貞夫

6月19日　LP泊
雨のち薄曇
7時30分頃突然日光がテントを照らす。太陽の恵みでテントの中が暖かくなる。
外は深いガスで小雨が降っている。氷河の滑走路に埋めてある緑、赤、青のシグナル灯が霞んで見える。今日も一日フライト待ちである。フライト待ちに始まりフライト待ちに終わるマッキンレイ。
氷河の先にあるホーレイカ峰や氷河の奥にあるハンター峰にガスがかかったり晴れたりする様子を見て一喜一憂しながら一日が過ぎだ。
昨夜ストーブで暖をとったのでガソリンが底をついている。明日フライト出来なければ大変なことになる。

6月20日　タルキートナー泊
曇のち晴れ
少し晴れ間が見えたので、濡れた物をテントの屋根に広げて干す。又今日もフライト待ちかと観念し、15時頃明日に希望を繋いで夕食のためストーブに点火の準備をしていた時、突然「今から45分後に飛行機が来る。直ぐに荷物をまとめて集合しなさい。」と遠くにあるエヤー・タクシイのテント小屋から大声でサリー姉さんの伝言がある。サリー姉さんはエヤー・タクシイ社のLPキャップである。
大慌てでテントをたたみ集合した。狭い氷河に2機も3機も小さなセスナが飛来しテント村はたちまち無人となる。我々は結局2時間後のフライトとなった。
上空から見るアラスカのツンドラの大地、緑のラーチの疎林、氾濫したような平原の河。かつてネーティブ・インディアンのイロコイ族が5000年の昔、シベリアの地から移動しアラスカの大地を過ぎて、ロッキーの麓を通り遠くメキシコの地を経て五大湖のあたりまで移動した「一万年の旅路」の思いにタイム・スリップする。
マッキンレイ、長く暖めていた課題が終わった。
応援してくれた人や同行した仲間達のお陰で、特に安村淳氏のお陰で最高齢登頂者と言う栄誉までついたサミッターとなった。このことは考えて無かったが嬉しい。あせらず、力まず、粘り強く、最後まで諦めずにやり抜いた結果だと思う。
しかしマッキンレイは体力、精神力、判断力、生活技術、登山技術のすべてを試される山であった。

（カヒルトナ河）

サバイバルの極致である。苦しいハードな山行ではあったが、幸い高度障害による頭痛もなく食欲の衰えもなかった。一週間の予備日を持っていたが一日使っただけであった。
疲れ果ててソリを引きながら下山していると、登って来る人々とすれ違う。「この人達は今からあの苦しみに立ち向かうのか。あの細い雪の稜線にそれだけの価値があるのか」とふと思う。
（終）

山頂アタック時の装備
上半身　テビロン薄シャツ、テビロン厚シャツ、羽毛下着、フード付羽毛服
下半身　テビロンショーツ、テビロン薄ズボン下、テビロンひだまり、羽毛ズボン下着、クライミングサロペット、
頭部　高所帽、スポンジ・チンマスク、羽毛フード、ゴークル
足部　テビロン指付インナー、パイル靴下、羊毛インナー、プラスチックアウター、オーバーシューズ、12本爪アイゼン、
手部　テビロンインナー、厚手毛糸手袋、羽毛オーバー手
その他　サブザック(45L)、ピッケル、ストック1本、ハーネス、シュリンゲ、カラビナ4枚
アタック時の行動食　水3㍑、カロリーメイト、どら焼き、コンデンスミルク、飴、チーズ、甘納豆、ビスケット各種、他

（最終頁に行動・高低表を記載）

じじぃうさん　誕生日登山

中野　稔

橋本祥案先生の九十三歳を祝って九重山に登る催しが十一月三日に予定されているが、その足慣らしを兼ね、先生の誕生日の十月二日、誕生日登山をした。
午前五時半前椎迫バス停前のコンビニで先生と合流。湯平経由で牧ノ戸登山口に六時半前到着。登山者の車は十台前後と少ないが今日は平日。台風一過の晴天とくれば、数日前の不安はなんだったのだろうかと不思議な感覚に襲われる。
六時四十分に出発。身長が五cmほどちじんだと言っていたが、矍鑠と歩く先生の姿は少年のようである。
第一展望台に七時丁度に着く。写真撮影で数分休んで沓掛山の尾

根に到着したのが七時十六分、沓掛山頂通過は同三十二分。扇ヶ鼻分岐が八時四十四分、途中追い抜く方達に丁寧に説明するのだ。

「九十三歳の誕生日に、語呂合わせで九重山に登っているのよ」に、みな一様に驚き、目を輝かせながら賞賛してくれる。嬉しいような、恥ずかしいような微妙な空気を感じながらも、ただ怪我もなく無事に行く所まで行ければそれで目出度しと思っている。

時折りテレビで、百歳前後の人々の様々なる分野で活躍する様を見かけるが、然もありなんと云う様な人生を送っているのには、だだ感服するのみだ。共通点は、愉快に陽気に万物に感謝しながら、自らの輝きで周りの人々を輝かさせている様は見事でもあり、人生の達人だという証かもしれない。

九時半、久住別れにてトイレ休憩、水捌けが悪く足元に数センチの水が溜まっている。どげんかせんとあかんと思いつつ、十時四十分山頂に到着。

（久住別れにて）

（久住山頂にて）

北側は雲海もなく晴れて涌蓋山等が薄黒い霞の海に沈んでいる様に見えたが、南側とくれば、雲海で祖母山山頂部と阿蘇高岳の山頂部が見えるぐらいでそれなりに素晴らしい景色だ。大船山付近も雲海に囲まれている。十数名の登山客は、県体で富山県人が五、六人、宇佐市民、福岡県人が数名。後は記憶が薄れているが、木曜日と言う平日にも関わらず登山客が沢山いるのだ。

昼食と写真撮影をして十一時十分に下山開始。登りの時よりも注意しながら下る。十一時五十分久住別れ、十三時丁度に扇ヶ鼻分岐。

沓掛山の登りで出会った健脚の方達から、中岳、天狗、星生山に行って来ましたと、我々三名を励ますように気遣いながら語る様に山男達の粋を感じた。十四時四十分駐車場到着。登りは四時間、下りは三時間半。登りはほとんど休みなしだったので、帰りに無理が出ないか心配したが、その心配はほとんど無用だった。

参加者…橋本、西、中野

嗚呼　七年山

（その3）

久保洋一

あたりは真っ白に雪が積もっている。ここで朝食、ザックをおろしガスでお湯を沸かす。これで手も温められる。二人でコーヒーを飲んだ。さらに水をたして湯を沸かし中野さんお気に入りの抹茶の葛湯を分けてもらい飲んだ。片栗粉が入っているので飲むときは少し熱いが体が温まる。山頂での写真を撮ったりで三〇分くらい桑原山山頂で休憩をとった。少し体が冷えてきたので、七年山に向かって縦走開始七時五一分。まず、山頂から木山内岳への縦走路を西へ向かう。

足元の雪は凍っている、気をつけないとすべりそうだ。今はもうかなりまばらになっている鈴竹をかき分けながら四〇〇ｍほども進んだところで木山内岳への縦走路から分かれ北へ向かう尾根らしき（広くてどの方向に行けば尾根に通じるのかこの地点ではまったく判断がつかない。）ものへと向かう。ここからは桑原山～木山内山への縦走路よりもっと人が入っていない領域だ。

でも鈴竹を掻き分けたような形跡がある。動物なのか？中野さんがこれからのルートの要所、要所にＧＰＳでポイントを落としてくれていたので、自分たちがちゃんと最初のポイントに向かって進んでいるのか確認しながら下っていく。この最初の分かれ道が一番慎重にならなければならないところだ。特に最初は地図とは違ってまわりが見渡せたとしても尾根であることすらわからない。幅が広すぎるからだ。

先へ進むと尾根も少し痩せてきてはっきりわかってくるのだが…。だけど尾根は下りで発散する、自分たちの進むべき尾根を特定するのはとても困難だ。進路を少し左にとりながら地形を確認し、下っていく。

静かに雪が降っている。寒くはないがだだっ広い斜面で進むべき道がはっきりしない。しかし、木立の間で藪こきのように進路を塞ぐ物はない。しばらく不安げに下っていくと最初の鞍部に着いた。ここまで来るとまずは一安心だ。広くてほっとするようなスペースだ。見上げると木々は雪化粧してとてもきれいだ。春だとここにシートを広げて家族で弁当でも食べている情景が似合う空間だ。

これから七年山までの三つのピークのうち、最初のピーク1161ｍへ向かう。ここからは尾根が痩せているので道はないが進むべき方向ははっきりわかる。しかも、藪こぎなんてまったくなく、普通の縦走路となんら変わるところがない。しかもとても快適だ。ただ人の踏み跡がないというだけだ。

次の1062ｍの峰もきわめて順調に通過。尾根や山頂には岩がかなりあるが、トラバースをしなくてもそのまま進むことができる。ただ一箇所、1062ｍのピークを越えた後だったと記憶しているがそのまま進むと降りられない箇所があった。それでも少し戻って（10ｍくらい）トラバースすれば難なく通過することができた。

ここらあたりに来るとうっすら前方に今日の目標の山、七年山の姿がガスの合間に見え始めた。雪も桑原山山頂から見るとかなり少なくなってきた。ここから八〇ｍほど下って最後の七年山の登りだ。ここもルートを迷うことはない。

ほとんど藪こぎらしきものもない。下りの勢いでそのまま七年山にとりつき徐々に詰めていく。手前の肩のところにとり付いてみるとまだもう少し先のほうにピークがある。100 mほど進んで山頂に一〇時四三分到着。七年山標高 1032 m。

ここがあの七年山だと思うとなんだかあっけなくもあるが、よくたどりついたという思いが徐々に湧いてくる。山頂には、なにもない。ただここがピークだということはよくわかる。東も西も急な斜面になっている。雪はなかった。飯田さんが登ってきたときの状況を二人で思い描きながら、しみじみ着いたんだなーという思いを噛み締めた。ここでしばらく休憩。

お湯を沸かし二人でカップ麺を食べた。食後、山頂の周りに落ちている木の枝を取り除き小さなケルンを積んだ。二人で交互に記念写真を撮り十一時八分下山開始。これからもう二つほど七年山の北にある小さなピークを越えて東の尾根をたどって林道へおりる予定だ。七年山からの下りはとても急だった。

少しおりると西方に端整な形のピークが見える。木山内岳だ。これを写真に収め、先に進む。次のピークは細長い台地状だ。ここのピークに宮崎市塩路の山本氏が立てた、七年山と書いた標柱があった。「このご夫婦はＧＰＳをもってなかったん

シリーズ

支部の先達を語る⑦

木本善重氏

（1914～1986）　会員番号４８４８

今回は支部の創立に初代支部長の永井氏や二代目の野口氏などと共に支部創立に尽力し、支部活動に積極的に参加すると共に地道な登山歴を残し、昭和六一年、七二歳で逝かれた故木本善重会員について、御子息である木本義雄会員からその思い出話しを書いてもらいました。

父の思い出

木　本　義　雄　（１２０１９）

父についての記憶は、勤勉実直、頑固、計画性があり、周りの人に親切で、社会に対しては日本赤十字等に、定期的に寄付をしていた。普段の生活は質素で、登山用具は古物店で購入した軍靴を改良し、スパッツ代わりにゲートルを使用していた。衣類は質素であった。あるとき、空のセメント袋を持ち帰り工作が始まった。私の仕事は袋の内側拭きと寝袋作成の裁縫であった。どこの山行で使用したのか記憶はありませんが、出来上がった時は子供心に嬉しかった。

昭和二〇年代の別府は、日米講和条約まで進駐軍が駐屯していたので、古物店には、軍靴・ゲートル・軍用衣類等が沢山あり父に連れられて行くのが楽しみであった。当時の気候は寒冷だったので、乙原滝経由で志高湖に行きスケートを教えてもらった。おかげで小学生高学年の頃には志高湖に行く山道は熟知していた。スケート靴は軍靴の底を改良したもので、自分で作成した。

木本家は朝見川の辺にあり、朝見神社や、南に見える吉備山（255 m）から鮎返貯水池横の禿山が散歩コースだった。鮎返ダムは、進駐軍の命令で別府市民が賦役で完成させたらしく、今思うと、市民にとって最高の贈り物だった。当時、父はPTA活動で幼稚園設置に力を入れ、教育委員会の努力もあり、全ての小学校に幼稚園が併設された。全校に給食設備があり、幼稚園の給食準備・片付けは、六年生の仕事であった。

当時の山行は日豊山岳会所属で、毎年・夏は志高湖でテント張るか城島高原の山小屋を利用して近くの山に行った。鶴見岳や由布岳が中心で、由布岳登山口まで歩いたり、神楽女湖から小鹿山まで足を延ばした。冬山は、鶴見岳や由布岳が多かった。

小学校の頃、鶴見岳に山小屋を作り、山頂に方位版を設置するとのことで、会員は、毎週牛の背に資材を積んで山頂に向かっていた。昭和四〇年頃、父の遭難騒ぎがあった。鶴見岳登山道の途中から、城島・鳥居間に新道ができ、一人で整備に行き、作業をやりすぎて帰りが遅くなったとのこと。会員が現地まで行き、無灯火の父を新登山口付近で見つけた。（今は無いと思います）

当時、私が鹿児島に在学中、牧園町で会議があり、出張の中日に、二人で韓国岳から高千穂河原まで縦走した。幼少の頃から、父が時刻表を開くと、出張か山行と決まっていた。事細かに乗り物の時刻を調べ、登山計画を作成し、二部作成し一部は家に置いていた。

私は仕事の都合で、ほとんど日本に居ることがなかったが、休暇中子供と実家に行くと、いつも皆と散歩するのを楽しみにしていた。昭和六〇年秋に子供と高崎山・山頂で食事をしていると、野口先生と父が登ってきたのに驚いた。山での出会いは高崎山が最後となったが、父の気持が皆に通じたのか、我家も自然を大切にする家族となった。

だろうね、だからここを七年山と間違えたんだね」と中野さん。まっ、頑張ってここまで来たのだから、杭はそのまま残して先へ進む。

ここから二万五千分の一地図にある806ｍのピークに向かって尾根を下りて行くのだけれど最初の下り口はとても急で尾根の姿はまったく見えない。「五〇ｍくらいも進むと尾根らしき姿が見えてくるはずだ。」と中野さん。確かに急な下りが一段落して少しゆるくなった辺りで進行方向右手に尾根らしきものが見えた。その尾根を進み806ｍの小さいピークから右へ分かれる尾根へ進む。

ここも現地ではよく良くわからない。ＧＰＳがなければ確実に迷ってしまうだろう。この尾根は倒木あり藪こきありで進みづらいところがかなりあった。「あと一六〇ｍで林道です」「あと〇〇ｍで…」とリアルタイムな音声ナビが私の後方から聞こえてくる。「あと五〇ｍで林道です」の声でもうすぐだと辺りを見渡しながら進むがまったく林道の気配はない。ところが少し進むと急に林道らしき白い帯状のものが下っていく斜面の先に見えた。これがＧＰＳの威力。

やった一三時一七分林道に下りつく。これからは林道を下り、朝置いた私の車におりつき（一四時一七分）、その車で登山口まで移動し、現地にて解散。全行程時間一〇時間四四分。

この七年山には後日談がある。私は右膝が一、五倍ほどに腫れあがり診察を受けると膝に水が溜まっているとのことで抜いてもらった。中野さんは腰、膝を痛め次の日は一日中寝ていたとのこと。二人とも前の状態に戻るのに一ヶ月くらいの期間を要した。これを人は七年山の祟りという。

（終わり）

豊後今市の三角点のある山

安部可人、石川洋祐

妙音山(577.6ｍ)　田ノ口の神社、公民館を右へ林道のカーブに駐車、561と577.6の間のコルを目指して植林地を北北西へ。古い林道横断。小竹の中、五〇ｍ、二つ岩のコル着。右へ再び猛烈な竹やぶ７０ｍ、目をつく（全治三日間）四等三角点。五〇分、独り。

三国境　公園から南西のコース、テープあり面白味なし。三五分、二人

芝原山(482.1ｍ)　田ノ口公民館に駐車し左へ急坂、一五分。小竹ヤブの台地、二度目、四等、小雪の中

栗灰山(409.9ｍ)　田ノ口から栗灰集落奥の四軒目の家は廃屋。その左からタケノコ林、北西一五分。四等、暗い

貝殻岳(607.8ｍ)　楽勝と油断。奥の集落斜面工事の上、左へ、南西へ、古い林道。小径、高度370ｍ、三〇〇ｍトラバース、登山路と合流せず。正面三角点に向かって北西へ、ヤブ直登、岩かべを右二〇ｍ、すぐ尾根、祠、苦労して四等とは残念、九〇分、独り

湛水(462.3ｍ)　集落の坂の途中、水路橋あり、左、ガードレール道、上がると右へ廃道、二〇〇ｍで終点。ヤブの中、四等、二五分

高倉山(320.3ｍ)　鳥居に駐車。神社の奥は絶壁。右へまき、上へ、北に向きを変えて一五〇ｍ、四等。暗い、一三分、独り、二度目は二人

下原(272.4ｍ)　原村大師堂、すぐ石段、神社、大岩のスギ林、西へ。カヤとイバラ、Ｎさん感謝。刈り払った台地、三等、二五分、下山は安部だけ安全第一でロープ使用。

麦庭(453.4ｍ)　今市、共和自動車の看板、駐車、目前の崩壊地、クヌギから西のたけやぶとなって、二〇ｍの中、四等、一二分

石合原山(541.0ｍ)　学校前下る、稲荷明神の板（ｂ）の手前を北東へ、草原、竹やぶ６０ｍ、三等、祠。、二〇分、帰りはｂへ一周、楽しい

荷小野（313.7ｍ）　荷小野集落、北の丘、眺めのよい墓地の中に浮き上がって目立つ四等。三分

尾原(359.9ｍ)　ダム移転で更地の尾原集落。右手に荷尾杵の東斜面、左の作業道からゆるい尾根を北へ、楽しい遠足。四等、十三分

荷尾杵(558.8ｍ)　荷小野から四〇〇ｍ左林道二ｋｍ、三叉路に駐車。右へ二〇〇ｍ、左の古い作業道から広い気持ちのよい尾根。一二〇度方向へ、少し紙テープをつけ、四〇分で四角の560ｍピーク、コル着、左、北へ変わる。赤松、わずかな岩稜は深山の雰囲気。素晴らしい、一〇分、三等三角点のみ。だれもきていない？下山、三〇分

（次はＮ氏の北尾根ルートを歩きたい）

高松(556.4ｍ)　尾根違い、八〇分、580ｍ地点で引き返す。五月のそよ風、雰囲気最高。次回は夏日、入り口は前と同じ、林道向山線橋、三本手前の電柱５６、すぐ沢は二股、その岩尾根を北東へ、快適、七〇分、。電柱５５、急坂、北東へ、５００ｍピーク経由の石川氏と二〇分遅れで頂上合流。この名山、四等とは残念。石さんルートで下山、荷尾杵に劣らず素晴らしい山。

岩詰(672.9ｍ)　杵ケ原、後藤住宅の左から林道終点（手前二〇〇ｍ）駐車。西へ、右は遠く目立つ崖、Ｃ級のヤブ、ミニ縦走、四〇分、四等。

小原（461.2ｍ）　小原集落、ツツジの咲く神社の境内に四等、隠れるようにあり。

石合(383.2ｍ)　小原から北へ、すぐ大カーブ、駐車、直進、古い作業道、北へ五〇〇ｍ、下り点を右へヤブを一五〇ｍ。四等あり。三五分。あきらめかけた石川さんが初めてＧＰＳを褒めてくれた。

下山(491.3ｍ)　おふくろの店、上石合へ左折、五〇〇ｍで三叉路、駐車、右から入りしいたけ場の境をあがる。二〇分。植林のぶちあたり、恐怖の竹やぶ、腹ばいの前進、朽ちた白柱発見、二三分の苦闘、石川氏大掃除、丸い金属つきの四等。誰も来るはずはなし。

柳井水(525.2ｍ)　合併記念の森、雨の中見つからず。二度目、草刈られて作業道に二級基準点入り金属箱

上白家(514.8ｍ)　野菜直売所あり。高圧線塔を西へ、六〇ｍ、少し右の奥。石さん四等を容易に見つけて呼ぶ。雨の中、一〇分間の出来事。

平連石(471.8ｍ)　一軒家の手前、右に廃バス、朽ちた小屋。竹やぶの中。美人観音の祠。何とその前に埋もれた四等を発見。大掃除、一〇分。

上高(557.6ｍ)　地図の林道、５００ｍ地点から左へ、鉄塔まで車で行ける（Ｕターン不可）。フェンス先の案内板からヤブ４ｍ。四等あり。

扇岳(556.8ｍ)　夏日、原集落、案内板入る、地図の作業道、直角右折。すごいヤブ、直角左折（４３０）、難しい、見逃し、下りはじめ、戻り、赤テープ見つけた。やる気になる。道はよくなり、二時間一〇分、三等三角点あり。眺めなし。下山四〇分、独り。

早瀬(405.4ｍ)　錬ケ迫公民館、丹生山入り口、牛舎、小屋裏の墓、

その右前方の若いクヌギ林の草むらに四等あり。二〇分。
双石(416.7m)　ダムから二五〇m、地図の林道は本当は南側を巻いて頂上に近づく。暗い植林地の中。四等。二〇分
長者原(625.1m)　四辻峠の展望あずま家の三〇mさき、鉄柵のヤブ三m先に四等あり。
高沢山(632.6m)　林道尺間線終点の白柱のある峠。カヤの作業道。一〇分ほどの散歩で見晴らしのよい丘の上。四等あり。
井手の上(595.0m)　高沢地区、三叉路、林道へ、水タンク二つ目のカーブ、一〇分直登、落ち葉の中、四等、二度目にして発見。
日平山(859.3m)　鎧ケ岳から老年でも楽しく歩ける縦走路。二五分で二等。秀峰まで少しヤブ、まだ歩ける。

(終わりに)荷尾杵と高松が最高。三角点は全部見つけて大掃除。数年は大丈夫。梅雨、曇、暗い樹林で60CSロスト多く役立たず。新型60CSXに変えて完全に機能している。(注)古い平成4.6発行の地形図では茶屋場の南東500mの台地に495.2(行かずじまい)がある。平成20.4の新版では495.2は消えて、491.3が近くに新設)(古地図も保存しておくと面白い)

私の無名山ガイドブック35

里山の稜線歩き（その6）

飯田勝之

今回は東国東の里山を歩いてみよう。この半島はかって、農業構造改善事業が進められるなかで、各地の広大な山野の至るところが伐り開かれてミカン園にされ、またキウイフルーツなどの果樹園に変えらたが、そのほとんどが採算が合わず、また農業の後継者がいなくなる中なかで放置されて、今ではその残骸が半島の山の中の至るところに残されている。こうした中で稜線の部分や北向きの斜面、あるいは傾斜の急なところなどは伐られずに残されてきた。といってもこの里山では千古斧を知らない所はありえない。薪炭林として大昔より人々の生活を支えてきた山だ。全てが二次林ではあるが、中を歩けば心が洗われるような素晴らしい林が少なくない。

妙見（60.3m）

まず最初は、里の近くにありながら、きわめて自然度の高い林が見られるところから。

旧国東町富来の、塩屋という海辺の里。この集落の真ん中を流れる堅来川右岸に、海近くまでせり出した稜線がその舞台だ。

妙見

塩屋の西を通る狭い旧国道から、南に分かれる車道の分かれ目に、さらに小さな道が西の山に向かって分かれている。小型車が一台やっと入れる道を少し入ると墓が点在し、左に墓と石碑があり、右にも墓のある所が二つ目の分岐、右に分かれる小さな道を入る。

細い笠道はコンクリート舗装されているがカヤに覆われていて、分けながら登ると墓地から五分足らずで四角なコンクリートの箱のような小さな建物の前に着く。これは神社で、大きなイチョウの木が前に立っている。そこから西に樹林に入ると、もうそこは立派な照葉樹の林の中だ。

稜線の南側は果樹園のあとで、ものすごいブッシュだが、稜線の北側は素晴らしい林である。神社から数十メートルも入ると、北東から北にかけての緩斜面は、大きなシイの木の林で、巨大な枝が頭上を覆う。シイの大木が立ち並ぶその下は、やや暗い中にも、落ち着きと安心感と懐かしさを覚える大きな空間だ。シイ、カシの大木が中心となって、ほぼ極相林に近いこうした照葉樹の林は、このごろの九州の里山では。神社か寺の境内などの、限られた範囲でした見ることが出来ないし、これほど広い林は里山には珍しい。

斜面の北側を巻き気味に進み、やや斜めに南西方向に登っていくと、林相は次第に複雑になり、シイ、カシの大木がなくなり、タブやヤマモモ、ナナメノキなどが加わり、ハゼやカエデ、クヌギ、ナラなどの混じった混交林となってくる。そして、傾斜がゆるくなりやがて平らな広い稜線の肩の部分に着く。その広い林の真ん中あたりに、木々の伐られた小広場がありその真ん中に三等三角点がある。

このまとまった照葉樹林は、さらに平らな稜線が西に続き、やや高度を上げていくと、かって果樹園として開墾されたあとのヤブ山となるが、そのあたりまでずっと北側の斜面一帯をしめている。

成佛（285.7m）

中世の田原家の拠城がおかれていたという、小門山（535.1m）中腹の東の台地に成佛と点名のある三角点がある。このあたりも小門牟礼城趾にまつわる場所であるようだ。鬼会で有名な成仏寺の東に金湧という、思わず嬉しくなるような名前の小集落がある。

ここより北の山に向かって入る車道を、キウイの果樹園などを経て上ると、県道から約八〇〇mほど入ったところに三叉路があり、右に分かれる道には「御所の陣の跡」と書かれた標識がある。直進する道はさらに果樹園の中を上り、スギの植林地の中を小門山中腹まで延びている。

右への林道をたどるのだが、コンクリート舗装されているものの、狭くて荒れてていて、途中から舗装もなくなり、車では勇気を要する。林道を分岐から400mほど上ると平らになり、さらにやや下り気味に複雑な地形の稜線上を行くと、三叉路から二五分ほどで急に大きな新しい林道に代わり、その先は急に下っている。この道は北の大恩寺地区の方から新しく造られた道だ。

ここが鞍部になっていて、右手

前方の小高い峰が目指すところだ。林道脇からブッシュを分けて入ると峠状の鞍部で、獣道を拾いながら稜線を登る。ナラ、クヌギ、タブなどの二次林の中を、ゆっくり稜線登り。やがて林道から十五分ほどで平らな稜線の上に達する。その数十m先がやや高くなっていて、ここから稜線は二つに別れる。左の稜線を進むと数十m先がまた小さなピークで、稜線はここでまた二手に分かれてその奥へと延びている。二つ

会員所属の山のクラブの紹介コーナー （No.９）

「日田山岳会」

佐藤浩幸（６０６２）

日田山岳会は昭和２６年（1951）８月２９日午後８時、日田市川原町照蓮寺にて、市内の山岳愛好者２７名のメンバーで結成集合が開かれ創立された。座長、長　金次氏（明治２７年-1877 年生）のもとで意見百出し簡単な規約が決められた。

役員、会長１名　監事３名～４名（毎月輪番制交替、会長補佐、会の運営を行う）集合毎月１回、会報毎月１回発行　会費月十円。会長、長　金次氏（56 歳）を満場一致で決定。監事　功能貫太郎、金丸寿雄、長野の各氏。事務局は日田市中央通り２丁目、ソナレ運動具店（功能氏経営、電話番号７１８番）となり、日田山岳会の誕生となった。この夜の集合の様子が登山意欲の旺盛な老若年のメンバーであった事が想像できる。

日田は北部九州を東西に流れる１４３ｋの筑後川の中間に位置する、経済と文化の中心となった天領の土地柄か、人々が大正期から昭和初期、戦後に至るまで色々な形態で川沿いから峠越え、山越え、山登り登山が盛んであった。英彦山詣り、寒の地獄行きなど、昭和初年、地域の青年団で日田保勝会が設立されてハイキングコースが設けられた。市内伏木原、一尺八寸山、五條殿詣（不動尊）の後、遊船川下りを入れた８コースであった。これらの行事が更に発展し、厚生、鍛錬又教育、学術探求、行楽、ハイキング、登山、キャンピングが取り入れられ、年々盛んになり低山から高山へ・・・。北アルプスへ足を伸ばす人もいたようである。

中等学校（旧制中学）には山岳部が設けられ、クライミングも行った。更に昭和９年（1934 年）日田町（市制前）をあげて「日田山の会」と云う同好会が結成された。会長、首藤今四郎（日田町長）、副会長福田多四郎、池田範六（学校長）ハイキング部長、橋本岩樹、山岳部長、合谷こういち　スキー部長、吉水信雄、学術部長、中島市三郎、評議員、長金次、功能貫太郎以下１９名、日田町中の各界のそうそうたるメンバーの構成であった。

昭和１１年（1936 年）のスケジュールは各部門でかなり専門的で、中島氏の地質研究、吉水、功能のスキー術指導、長の昆虫、蝶の収集、石井忠男の植物採集。キャンピングの指導にあたっては最後の目標は「野営の後に一物も残さず、唯残すのは感謝の二字のみ」という様な要領であった。

昭和２１年（1946 年）日田市体育協会が設立され、その一部門として山岳部がおかれた。昭和２５年（1950 年）日田市体育協会部長、長、功能の両氏等による指導で県体登山会を釈迦、権現岳連峰で盛大に開催した。これが翌年日田山岳会の誕生となった。現在会員 11 名　在籍した会員 151 名。

名称　日田山岳会
創立　昭和２６年（1951 年）８月
会長　初代　長　金次、二代　矢野　真、三代　佐藤浩幸、四代　柿本栄二郎、五代　高倉敏明、
六代　功能豊三郎、七代　森山　稔、八代　日野正行、九代　諫山孝司
会員数　１２名
所在地　日田市港町１－１１
会の主な合宿、山行
昭和２６年（1951 年）県体、釈迦、権現岳
昭和２７年３月　傾山南壁登攀　矢野真等
昭和３２年（1957 年）８月剣岳・森山等５名
昭和３９年１月　冬富士山　金丸等５名
昭和４０年５月　コーイモンディ登山・隊長　矢野真参加
昭和４１年（1966）～４９年（1974）１月　氷の山・富士山・剣岳合宿
昭和５０年（1975）～５０年（1985）矢野真　マーカスベーカー登山。１月　遠見尾根から五竜岳。大力他２名、ニュージーランド・タスマン氷河スキー行。佐藤他２名、マッターホルン、エキニドミディー、プチシャルモ登攀へ冬富士合宿。　佐藤他１名、岳連ポーロンリー隊参加。
昭和６１年（1986）～平成７年（1955 年）１月　西穂往復、冬期・鹿島槍　夏期・剣岳合宿
平成２年　県体日田市で開催。　冬富士・ビョウブ尾根より山頂へ。　佐藤のサハリン（樺太）登山行。
平成８年（1996）～平成１７年（2008）朝日連峰合宿、日本山岳会アルバータ峰（3619）初登頂７５周年記念行事参加、森山以下５名、アサバスカ峰（3490）、ウィルコックスピーク（2884）登山

目の稜線分岐の、やや広く高い地点の中央に三等三角点がある。

このほとんど平らで長く、複雑に入り組んだ稜線の地形は、皆にするには申し分のないところだろう。アラカシ、コナラ、クヌギ、ノグルミ、ヤブニッケイなど、豊富な種類の木々の中、小鳥の声もにぎやかで、林の中は明るくて、自然がいっぱい。ここがもう少し町に近かったら、格好のファミリーハイクの場所となるだろうと思う。

回覧

お知らせ

十一月月例山行のご案内

・十一月十五日（土）
・目的地…**1100mの山へ**＝高千穂野・1101.0m（熊本県山都町）、鞍岳・1118.36m（熊本県菊池市）
・出　発…十一月十五日（土）午前五時サニー出発

十二月月例山行のご案内

・月　日…十二月七日（日）
・目的地…**1200mの山へ**＝式部岳・1218.9m（宮崎県西都市）
・出発…十二月六日（土）午後五時サニー出発
・参加者と話し合って、出発時刻を調整します。参加希望者は事前にご連絡下さい。

一月月例山行のご案内

・月　日…一月一七日（土）
・目的地…**100mの山へ**＝琴平山・102.1m（杵築市）、遠見塚・115.4m（杵築市）六郎山・101.0m（国東市）
・出　発…一月十七日（土）午前六時サニー出発

二月月例山行のご案内

・二月二二日（日）
・目的地…**200mの山へ**＝伊勢山・200.0m（中津市旧耶馬渓町）、猪口山・206.1（中津市旧三光村）
・出　発…二月二二（日）午前五時サニー出発

事務局よりお知らせ

第十五回視聴覚障害者支援登山大会

七月の支部報でお知らせしました通りに実施します。多数の参加をお願いします。

なお、同支部報では、手違いで**一〇月月例山行の日程**とダブっていましたので、**月例山行を一一月一日に延期**します。

・日時　平成二十年十月二十六日（第四日曜日）
・場所　宇曾山（六四四m）（大分市野津原）
・集合場所　のびゆく丘駐車場（建物なし・駐車場のみ）
・日程
　八：五〇　駐車場集合
　九：〇〇　開会式・出発
　一一：〇〇　山頂到着（昼食）
　一二：〇〇　山頂出発
　一四：三〇　駐車場到着・閉会
※　連絡先及び参加申し込み…佐藤善則会員（TEL…0977-568-0115）

橋本会員の九三歳祝賀登山会

橋本祥案会員（5908）の満九三歳のお祝い登山会が、**十一月三日**（月）に行われます。支部会員で参加できる方は一緒にお祝いして下さい。出発の場所・時刻等は各自自由ということで、参加者は山頂に**午前十一時**に集合となっています。みんなで久住山頂でお会いし、祝福しましょう。

「宮崎ウエストン祭」について

祖母山の宮崎県側からの登山口のある五ケ所高原は、日本アルプスの命名者として有名なウオルター・ウエストン師がここを訪れ、祖母山に登ったという記録が残り、三秀台にはウエストン師を偲び記念碑が建てられています。

ここで毎年開かれるウエストン祭、そのご案内が支部に届いています。

・日時　十一月二日　前夜祭
　十一月三日　当日祭
・宿泊　五カ所公民館
・会費　宿泊代込み　三，〇〇〇円
・参加問い合わせ　日本山岳会宮崎支部事務局（TEL 0985-53-0150）都甲豈好氏
・出　発…一三日午前七時大分発
　佐伯市木立登山口集合　八時三〇分
　一四日午前七時日杵発
　臼杵市鎮南山登山口集合　午前七時三〇分
・忘年会
　場　所…臼杵市「喜楽庵」臼杵市城南9組 TEL0972-63-8855
　会　費…一〇．〇〇〇円（ふぐ料理）
・宿　泊…宿泊は「喜楽庵」の近くの「老人憩いの家」をお借りすることが出来ました。寝具はないので寝袋などを用意して下さい。なお、朝食は各自で用意して下さい。
・忘年会のみ参加の方は午後六時までに集合して下さい。

忘年山行と忘年会のお知らせ

今年も重廣恒夫さんと一緒に

今年もおなじみの重廣恒夫さん（関西支部長）と一緒に支部忘年山行と忘年会を予定しています。皆さん多数ご参加下さい。

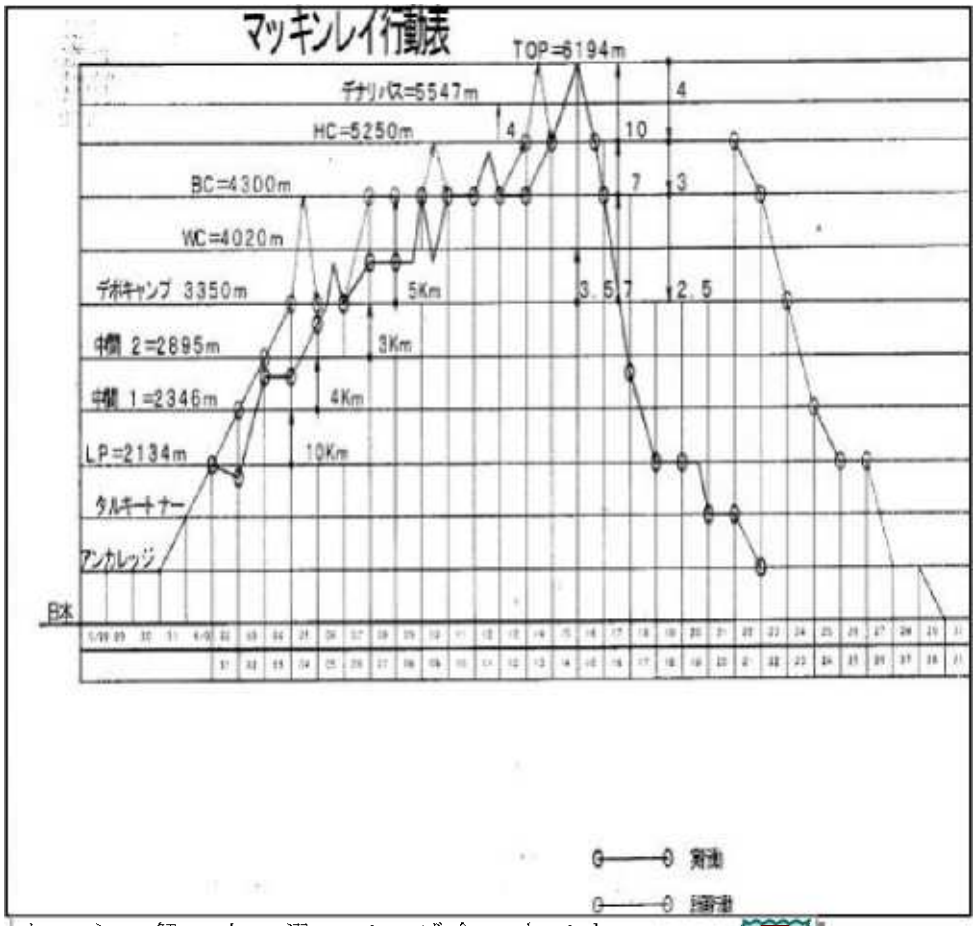
・月　日…十二月十三日（土）～一四日（日）
・山　行…一三日　元越山・彦岳
　一四日　鎮南山・樅木山

アンケートのお願い

今回の支部報に会員アンケートのハガキを同封しました。

（一）支部創立５０周年記念海外遠征登山について（出来るだけ多くの会員が参加でき、海外遠征登山として記念に残るようなところとして、どんなところが良いか、など）（二）支部報について（三）支部忘年山行と忘年会について

です。**十一月十五日**まで回答をにお願いします。



後記

○ 内匠ノ池から、大石峠から・・・、あの分水嶺を歩いたコースをもう思い出せない。

○「大分百山」も大将陣山、樋桶山、渡神岳は月例山行で後ろをついてあるいただけだ。近くやりなおそう。

○ 今年、惣見山の帰りに十数年ぶりの木ノ子岳。その急坂に降参。昔の月例の時とはちがってみえた。

（安部）

○ 青少年体験登山大会。七回目を数えたのか。それだけ歴史を重ねているのか。『継続は力』というが、やはり物事は続けなければ価値は生まれてこないものだ。

○ そう思う反面、これでいいのか？という思いがある。成果があったと思うのは『我田引水』で、はたがどう評価しているのかは分からない。

○ 『継続はマンネリのもと』という揶揄もある。『公益的事業』という位置づけで実績を上げ、社会的評価を受けなければならなくなるＪＡＣのこれから・・・。そうした見直しも必要だと考える。

○ 支部報も同じだ。マンネリに陥ることからの恐怖・・・。何時も頭にあることだが、会員の意見も聞かせて欲しいところだ。

○ 支部山行でヤブこぎ中に、アシナガバチに刺された。先頭を行くＮさんのあとを歩いていた時のことだ。先頭はハチのヤブをつついても気づかずに・・・。二番目を行く者が逆襲を受けた。

○ 二番目を行くのが安全で楽だと思いがちだが、アフリカ探険隊を猛獣が襲うのは二番目だそうだ。二番目に行く人が一番非力と猛獣は知ってるからだという。ハチもそう見たのかな？

（Ｋ・Ｉ）

ここは何処？

・ この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？

・ お分かりの方は事務局まではがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。（二名までで、正解多数の場合は抽選します。）

・ 締め切り十一月三〇日

前回の正解は南アルプスの三峰岳から塩見岳を撮ったものでした。

日本山岳会東九州支部報　第４３号

２００８年（平成２０年）１０月２５日（土）

発行者　梅　木　秀　徳
編集者　飯　田　勝　之
発行所　〒870-0021
大分市府内町１－３－２０
サニースポーツ内　西　孝子方
TEL･FAX　097-532-0926
題字　（故）佐藤正八